中国・南昌市への青年訪問団派遣事業　事後報告書

◆学校名と名前：　高松大学 経営学部　近藤遼太郎

江西省及び南昌市に滞在中の様子（写真を含む）や本事業で得たこと、感想等をご記入ください。
（１，０００字程度）

今回、私は香川県高松市の青年訪問団の代表として高松市と姉妹都市協定を締結している中国江西省南昌市を訪れました。
私は中学生の頃から中国に訪れてみたいと考えていました。今回、青年訪問団として訪問することができ、大変光栄でした。
私が中国の上海空港に降り立ち中国の国土に足を踏み入れた際は、憧れの中国に足を踏み入れた実感が全く湧きませんでした。中国語で使われる漢字は日本で漢字を使っている私たちにとってさほど違和感はありませんでした。中国語を見て、勘を効かせると、ある程度書かれている内容を理解することができました。
それは異国の地に来たという事実と同時に、中国と日本は同じアジア圏のメンバーだと改めて実感することができました。
その後、飛行機を乗り継ぎ、南昌市に向かいました。
南昌市では南昌高松中日友好会館に訪問しました。そこには日本の文化や風習が数多く展示されおり、高松市のことだけではなく中国人民共和国や南昌市についても大きなスクリーンに映し出された映像や数多くの展示物、解説者さんの解説によって学ぶことができました。
私は会館についてインタビューを行いました。そして中日友好会館には毎日、数名の訪問者がいると教えていただきました。私たち日本の文化を学びたいと思ってくださる方々が来てくださるそうです。私たちの文化が、中国の地で伝えられていることを知り、誇らしいと感じました。
その後、中国の方々による盛大な交流会に参加させて頂きました。特に私は高松市の代表として様々な方々と一緒のテーブルで食事をいただくことになり、大変光栄なことでしたが、その分緊張しました。ですが、通訳の方のお陰で楽しくお話をすることができました。その後私は、壇上でスピーチを披露しました。スーツでスピーチという体験は、人生で初めてだったので震えが止まりませんでしたが、なんとかやり遂げることができました。

私は今回の青年訪問を通じて相互理解の重要性を学ぶことができました。
現在の中日関係には、様々な困難があります。しかし一番重要なのは、一方的に相手の考えを悪く予想し、対立を深めるのではなく、相手国の文化や風習、歴史を学び、交流することで互いの理解を深めることで、対立を無くし、交流や交易の分断をなくすことで、互いに繁栄と利益を得ることができると私は今回の訪問を通し、気づくことができました。

今回の訪問を通じて中国にて私たちを導き、助けてくださった南昌市及び、江西省政府の関係各所の皆様、及び日本にてサポートをしてくださった高松市の皆様にこの場を持って御礼申し上げます。